

第2章

「語り物」の用語史

蒲生 郷昭

まえがき

- 1 「語り物」の初見
- 2 「歌い物」との対置
- 3 「語り物」の浸透と定着
- 4 「語り物」の深化
- 5 対置への疑問
- 6 「歌い物」補説

あとがき

まえがき

語り物と歌い物。音楽の分野では、日本の伝統的な声楽の様式を、このふたつに分けることが、当然のことのようにおこなわれている。そして、日本のどの声楽種目も、成立時の所属系統によって、そのどちらかに属するとし、それにもかかわらず、成立後のその音楽様式の変遷などのゆえに、事柄は単純ではない、などをつけ加えられる。音楽の分類であるということで、いわゆる話芸は、対象から除外されることになる。

筆者もまた、語り物といい、歌い物という。ただし、純音楽理論上の概念として、つぎのような意味で使いたいとおもう。つまり、旋律よりも詞章の内容を一義的にあつかい、詞章がもつ日本語としての性格が旋律に大きく反映するのが語り物で、詞章の内容よりも旋律の動きを一義的にあつかい、詞章の日本語としての性格が旋律に反映する度合いが小さいものが歌い物である。語り物では、詞章の文学的内容が演唱形式に大きく反映するのに対し、歌い物ではその度合いがすくない、あるいは目立たない、という違いも指摘できる。平たくいえば、リズムが拍節的であれば替え歌やカラオケがいちおう可能なのが歌い物であるのに対して、ほとんど、あるいはまったく、不可能なのが語り物ということになる。しかし、両者の境界（種目を分類するときの境界ではない）は、かならずしも明確ではない。

ふたつの概念を対立させるとき、詞章内容を問題にする立場がある。すなわち、歌い物の詞章が叙情的、叙景的であるのに対し、語り物では叙事的であるというのである。しかし、純粋に音楽理論の立場から考えるときには、詞章内容をその基準に含めるのは適当ではない

のではなからうか。叙事的な詞章でありながら、音楽としては典型的な歌い物になっているというものがすくなくあると、筆者は考える。文学の立場からは語り物であっても音楽の立場からは歌い物である、という音楽が存在しても、すこしも差いつかえないであろう。

小稿は、語り物と歌い物という概念が、どこで生まれ、どう広まったのかを、跡づけようとする試みである。しかしながら、時田アリソン氏をはじめ、共同研究者各位にはまことに申し訳ないことながら、調査が十分には行きとどいていない状態での執筆なので、満足すべき結果はえられないであろう。大方のご高批、ご高教をお願い申しあげる。なお、題目は、共同研究のテーマ「日本の語り物——口頭性・構造・意義——」にそうよう「語り物」の用語史」とし、小見出しにもその語を用いているが、音楽の分野において対概念となっている歌い物についても、同程度にあつかう。

本稿での引用文は、片仮名を平仮名に直すとか、てきぎ読点や送りがなを補う、ルビの大部分を省略する、などしてあるので、かならずしも原文のとおりではない。傍点も省略したので、すべての傍点は筆者がほどこしたものであることになる。また、「うたいもの(謡い)物、唄い物、歌い物など」の表記は、直接の引用を除いて、原則として「歌い物」で統一する。

1 「語り物」の初見

語り物、歌い物という言葉は、いつごろから用いられるようになったのだろうか。

ふたつの語のうち語り物については、『日本国語大辞典』第2版のその項に示されている、2世南仙笑楚満人作の人情本『軒並娘八丈』3篇巻之下第11套の「好物な俺が語り物でさへ、角力は虫が好かぬかして、大汗を掻いたことぢや」が古い⁽¹⁾。2世南仙笑楚満人というのは越前屋長次郎、つまり、のちの為永春水の別号のひとつで、同書は文政7年の刊である。ここでの語り物は、「語るもの」といったような意味で、つまり、たとえば「浄瑠璃」の代用語として、使われているといってよいであろう。

では、研究者が今日的な意味で使うようになったのは、いつからであろうか。じつは、「まえがき」で「調査が十分には行きとどいていない」と述べたのがもっともよく該当するのがこの点なのだが、管見では、大槻文彦が館山漸之進の『平家音楽史』に寄せた序文で用いたのが早い。大槻がその序文を「平曲は、語り本の祖にして、古雅幽婉を極むるもの、後の語り物は、皆、其流を汲みて起れるなり」と書きおこしているのがそれである。ここでの「語り物」は、ひとまず音楽の種目分類ないし様式分類用語として読んでおきたいとおもう。これが筆者による初見で、執筆の日付は1910年(明治43年。以下、和暦の記載をおこなわない)6月である。ただし、大槻が、これを「読み物」に対する語として使っているのだとすれば、その意味での使用は、後述のように、高野辰之のほうが早い。そして、様式としての「語り物」の初見は、これより3年のちということになる。

館山のその本の序文では、もう一人、山田孝雄もこの語を使っている。すなわち、自身がそのとうじ調査していた平家物語の諸本約 50 種に触れたところでの、「大別して読み物の平家物語と語り物の平家物語との二つとせむ」である。文学としての平家物語と、音楽としての平家物語がある、といているのだとおもう。

おなじころ、高野辰之もたびたび語り物といていた。ただし、その使いかたにはふたとおりあって、ひとつは山田とおなじく読み物に対する語り物で、「十二段草子考」に見ることができる⁽²⁾。もうひとつは「一中節の語り物」、「播磨掾の語り物」などという使いかた、つまり「語ったもの」、いいかえれば「持ち曲」「演目」の意味で、「一中節の語り物」は「助六浄瑠璃年代考」に、「播磨掾の語り物」は、やはり「十二段草子考」にある。「助六浄瑠璃年代考」での使用は、さきに筆者が「初見」とした大槻による使用より早かったようである⁽³⁾。なお、「十二段草子考」では、「語り物」という 1 語のふたとおりの使いかたを、接近したところでおこなっている。

もっとも、演目の意味でなら、高野による使用よりさらに早い 1895 年に、斎藤緑雨が小説『門三味線』で「ねえ浜様、語り物は何にしましよと、何や彼や譬喩をひく三味の流石師匠」と使っているようだし⁽⁴⁾、1905 年から 6 年にかけて書かれたという夏目漱石の『吾輩は猫である』にも「細君が御歳暮の代はりに摂津大掾を聞かして呉れろと云ふから、連れて行つてやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して「鰻谷」だと云ふのさ」とある⁽⁵⁾。この意味での語り物なら、明治以前に使われている例も見つけられるのではなかろうか。

なお、高野が 1907 年の「室町時代の小歌」において、「声楽」といったような意味で「謡ひ物」ともいっているのは⁽⁶⁾、後述のように、問題とするには当たらない。

ここで、ほかならぬ大槻が著した国語辞典『言海』を見てみよう。筆者は、判型の異なる 3 種の『言海』を調べた。すると、3 種とも「かたる」の項はあって、「(二) 節をつけて読む。「平家を——」「浄瑠璃を——」」とありながら、「かたりもの」の項は立てられていなかった。3 種のうち 1 種は、1904 年に第 1 版が出た『改版言海縮刷』の第 340 版だが、他の 2 種は奥付が失なわれていて、刊年はわからない。しかし 3 種は、前付け、後付けには小異があるものの、1 ページから 1110 ページにいたる本文部分は、判型の大小があるだけで、内容はまったくちがわない。ここでは、筆者が 1891 年刊の初版を見ているかどうかということは、問題にならない。『言海』には、「語り物」の項は立てられていないのである。

それに対し「うたひもの」は立項されていて「節をなして歌ふべき詞曲ことばの総称。歌曲」とある。歌ひ物の語は、語り物とはちがって、古くから用いられており、高野が使った「謡ひ物」も、これであった。ついでながら「読み物」の項は、「読むべき物。即ち、書物」とあって、山田が使ったような、語り物の対語としてのあつかいではない。

大槻文彦と山田孝雄、それに高野辰之の 3 人は、とうぜん知己の間柄であつたろう。その 3 人、とくに大槻と山田の 2 人が語り物という言葉を使ったのは、偶然の一致ではなかった、

つまり、2人(または3人)の周辺では、それ以前から語り物という言葉が使われていたものかとおもう。しかし、いま見たように、3人の使いかたはおなじではなかった。『言海』に「語り物」が立項されていない事実を考えても、こんにちに近い概念で語り物の語が使われることがあったとしても、まだ普及も確立さえもしていなかったということになる。

『平家音楽史』が刊行されたのは、2人が序文を書いた1910年の10月だが、館山も、おそらくそこで語り物の語を使っていない⁽⁷⁾。

2 「歌い物」との対置

『平家音楽史』の3年後に、音楽の分野で、「語り物」の語を使った人がある。鈴木鼓村である。しかも彼は、いちはやく、語り物と歌い物を対概念として提示した。『日本音楽の話』の最初のページに、いまでいうキーワードの形で「謡ひ物と語り物」と掲げ、つづく本文で「我が邦楽史は歌舞の音楽史であつて、また殆んど声楽史であるのだ。ところが其の声楽の中にも「謡ひ物」と、「語り物」との種別があつて、これ亦他に見ざるの例を示して居る」と述べているのがそれである⁽⁸⁾。

鈴木は、同書のほかの何か所かでもこの言葉を使っている。たとえば、「平曲」なる一種の「語り物」が産れ出でた⁽⁹⁾とか、さらに「声楽」を「謡ひ物」と「語り物」との二つに種別するのは、平曲発生時からではあるが、(中略)それはこの期にあつての「三弦楽」の二大別と云つてよいのであつて、「謡ひ物」としては「小唄」、「長唄」、「俗謡」の三種と、「語り物」としては「諸浄瑠璃」といふのである⁽¹⁰⁾などというように。

声楽種目は所属系統によって語り物と歌い物とに二大別される、ということを最初にいつて、日本音楽に対するその後の把握や記述に大きな影響をおよぼしたのは、どうやら鈴木鼓村であるらしい。ついであるが、単行本の書名に「日本音楽」あるいは「日本の音楽」の語を用いたものとしても、8月1日発行の本書は、おなじ年11月に発行の兼常清佐『日本の音楽』⁽¹¹⁾に先んじている⁽¹²⁾。

ところで、その『日本の音楽』の第1編「平語及び平家琵琶」で、兼常も「近代の語り物、謡ひ物には、もはや墨譜は不必要になつてしまつた」といつている⁽¹³⁾。自序によると、同書は、刊行の1年あまり前に脱稿しているらしいから、語り物と歌い物を対立させるという着想をえたのは、兼常のほうの方が早かつたのかもしれない。兼常はまた、「形式のみの音楽に対して内容の意義をも含んだ音曲」といういいかたで、ふたつの様式をめぐつて、詳細に論じてもいる⁽¹⁴⁾。鈴木も兼常も、それぞれの著書の出版前に住んでいた京都の地で多くの知見をえているのだが、その事実と2人の記述に共通する部分があることとの関係には興味をおぼえる。しかし、後人に対して影響をおよぼしたのは、やはり鈴木⁽¹⁵⁾の『日本音楽の話』であろう。なお、注14の引用も第1編「平語及び平家琵琶」からのものだが、平曲そのものについては、

兼常は「平語も講式の如く読みものである」としている⁽¹⁵⁾。

では、鈴木「謡ひ物」と「語り物」といういいかたは、彼が独自に考えたものなのだろうか。鈴木が、のちに那智俊宣の名で出した『日本音楽の聴き方』⁽¹⁶⁾を見よう。彼は、その「総説」でも同様の対概念を提示しているほか、何か所かで語り物とか歌い物あるいは歌物の語を使っている。興味深いのは「平家(平曲)」の項で、山田孝雄説の引用の形で書かれている部分の最後に、「一種の「語り物」として作り上げたものである」とあることである⁽¹⁷⁾。これをそのとおりに受け取るならば、鈴木(那智)は、山田の用語を取り入れて語り物といったことになる。しかし、山田が事実上の著者である『平家物語考』には、「秘事と称するは、瞽師が語り物を伝授する上につきての事なるは明らかに知らる」などとは用いられていても⁽¹⁸⁾、鈴木引用の直接のもとになったとおもわれる文言は見いだせない。『日本音楽の聴き方』のこの部分は、山田説を鈴木なりに要約したもので、山田が使っていない言葉を、鈴木がそのときに使ってしまったものと、筆者は想像している。

ところで鈴木は、ふたつを並べるとき、「謡ひ物と語り物」というように、つねに歌い物のほうを先にしている。これは、鈴木自身が箏曲家だったため、というのではない。理由はふたつ考えられる。ひとつは筆者の想像だが、古代音楽にもくわしかった彼は、以前から知っていた「うたひもの」の語をまず取りあげ、それに当時一部で使われはじめていた「語り物」の語をどこかで知って対置したのではないかということである。「どこか」というのは、とうぜん平曲をめぐる文章か議論であったであろう。もうひとつは、鈴木文章からはっきり読みとれることで、彼は、日本音楽史上、最初の語り物音楽は平曲であって、歌い物のほうが歴史が古いと考えていたことである。「謡ひ物と語り物」という順序は、鈴木にとっては必然だった。兼常が、注13の引用で語り物を先に出していながら、注14の引用では歌い物に相当する「形式のみの音楽」のほうを先にしているのも、ほぼおなじ理由による。

いま筆者は、「以前から知っていた「うたひもの」の語」といったが、その歌い物は、高野が「室町時代の小歌」で使った「謡ひ物」とは、むろんちがう。歌い物の語は、後述のように、江戸時代からほぼ「声楽」の意味でも使われていた。鈴木はそれを知らなかったのか、知っていながらべつの意味に使ったのか、筆者は何ともいえない。

3 「語り物」の浸透と定着

以後、「語り物」の語は、すこしずつ広まっていく。

たとえば、津田左右吉が『文学に現はれたる我が国民思想の研究——平民文学の時代 上』を著したのは1918年とのことだが、それを『津田左右吉全集』で見ると、近松時代の浄瑠璃の文章をめぐる「所謂景事や道行きや又は七五調や、或は故事成語を並べ立てる修辭法は、偶人劇そのものからいへば決して大切なものではなく、謡ひもの乃至語りものとしての樂的効果(と

いふもや、不穏当な語ではあるが) からいつても、価値の甚だ疑はしいものである」と述べている⁽¹⁹⁾。ここでは歌い物と語り物とをはっきり区別しているのではなく、両方を合わせて漠然と「音楽」ないし「声楽」といったような意味で使って、いまの引用の直前にある「読み物」の語と対比しているとみてよい。同書で津田は、「山本土佐(角太夫)の語り物」、「加賀(引用者注=宇治加賀掾のこと)の語り物」というように、演目の意味でも用いている⁽²⁰⁾。

全集本の巻末には索引がある。別巻3に収められた姉妹作『文学に現はれたる我が国民思想の研究——武士文学の時代』⁽²¹⁾の「例言」第4項から類推すると、作成には津田自身がかかわっているようだが、歌い物も語り物もその索引に掲出されていない。

ついでながら、この『文学に現はれたる我が国民思想の研究——武士文学の時代』は、いまの「平民文学の時代 上」の前年に出したものだが、その第3章を、語り物の語を使って解題しているものがある⁽²²⁾。しかし、注21の全集本で見たところ、津田自身が当該章で語り物といっている事実はない。すでに鈴木鼓村(那智俊宣)もおなじことをしているが、そういう著述をも、まったく無意識に、語り物の語を使って説明してしまうほど、この語が当たりまえのものになっていたことを示している。なお、津田がこの章で「謡ひものとして作られた宴曲」といっていることを指摘しておく⁽²³⁾。

1926年、岩橋小弥太は、『無明法性合戦状』という古文獻を紹介して、これは琵琶法師が語った合戦物語のおもかげをしのぶに十分である旨をいっているが、そこで「語り物の詞章としての平家物語」とか「語り物の無明法性合戦物語」などと使っている⁽²⁴⁾。いまの津田による使用の8年後ということになるが、これは現在の使いかたとおなじと考えてよいであろう。

高野辰之は、注2に示した『歌舞音曲考説』の11年後の1926年に『日本歌謡史』を刊行した⁽²⁵⁾。そしてそこでも、何か所かで語り物、歌い物の語を使っている。語り物でいえば、多くが演目の意味であるなかに、「平曲は、其の語り物たる処からいへば、(中略)語り部の末流と見るべきである」、「平曲の如き語り物」という使いかたがある⁽²⁶⁾。これらは、今日の語り物に近い意味とも、読み物に対する語り物とも読める。歌い物の語も、「盲御前の謡ひ物」というように、演目の意味で使っているが、ここでは、直後に「(前略)語り物としては前代以前の平曲が盛んに行はれて」とつづけている⁽²⁷⁾。

このように、高野は、語り物も歌い物も、本文中にかなり使っているばかりでなく、小見出しにまで用いている。それなのに、どちらの語も索引に掲出されていない。概念が厳密に規定されている術語という意識を持つことなく——じじつ、いま見たように、厳密な使いかたではない——、いわば何気なく使ってしまった、ということなのではなからうか。

おなじ年に、田辺尚雄は『日本音楽の研究』を出した⁽²⁸⁾。田辺には、すでに『日本音楽講話』があるが⁽²⁹⁾、そこではおそらく語り物、歌い物の語を使わなかった。その田辺が『日本音楽の研究』にいたって「長唄や歌沢節の如き所謂「^{うたもの}唄物」は、浄瑠璃派の諸節の如き所謂「語り物」と全然性質を異にする」というようになったのである⁽³⁰⁾。日本音楽の全体に適用したものではないし、分類したというより説明に使ったというのに近いともおもうが、鈴木

鼓村が措定した対概念を取り入れたことはたしかであろう。田辺は「鼓村の著書『日本音楽の話』『耳の趣味』などは私の愛読書であった」と述懐している⁽³¹⁾。彼は、6年後の『日本音楽史』でも、平曲をあつかった項を「語りもの音楽の勃興と平家琵琶」と題するとか、浄瑠璃を「語り物音楽」と表現するなどしている⁽³²⁾。

確立した術語として使っているといえない点は、伊庭孝の場合もほぼ同様である。高野の『日本歌謡史』、田辺の『日本音楽の研究』につづいて1928年に刊行された『日本音楽概論』の平曲の項で、「白音は語り物としての音曲の主要な条件で」といっているが、「表現法の態度」について述べるところでは「物語の原文の意のあるところは、形式を破らざる程度に於いて、その腹を表はさねばならなかつたのである」などというだけで、語り物の語を使っていない⁽³³⁾。義太夫節について「今日、語り物として万人の知るものは、百段五十題に過ぎまい」というのは、むろん演目の意味である⁽³⁴⁾。索引にも語り物、歌い物の語は掲出されていない。1934年刊行の『日本音楽史』⁽³⁵⁾では、伊庭は、語り物の語を、おそらくまったく使っていない。

ところで、伊庭の『日本音楽概論』発行のすこし前から、柳田国男がこの言葉を使い始めている。まず、1928年3月初載という「鹿角郡の童謡」で「手毬唄を盛んに唱へて居た少女たちは、一方に多くの座頭物語、木遣や酒宴歌、さては旅の読売の徒のかたり物の、いとも熱心なる聴衆であつた」といっている⁽³⁶⁾。また、おなじ年4月初載の「昔話解説」では「平家は如何にも物悲しい語り物である」と⁽³⁷⁾、5月初載の「一寸法師譚」では「しか信じられた語り物の主人公」と⁽³⁸⁾、さらに、8月初載の「木思石語」でも「発達の跡はほゞ二流れになつて居て(中略)、例へば国々の盆踊の歌などでも、ごく簡単な何度でも繰り返される短歌と、俗にクドキと称する長編の語り物とがあるのみ」というように⁽³⁹⁾、たびたび使っている。

筆者は、そのなかの「木思石語」について、筆者が使用した『定本柳田国男集』本を初載誌と校合した。その結果、『定本』で書き改められた箇所もわずかに認められるものの、ほとんど初載そのままであることを確認した。これら「かたり物」や「語り物」は、当時の音楽学の用語を採用したものなのか、「普通語」⁽⁴⁰⁾を使ったという意識なのか、筆者にはわからないが、音楽研究者の使いかたとほとんど違うものではなかったといえることができる。なお、柳田は、「木思石語」のいまの引用の直後に、「「うたふ」と「かたる」とは元々異なる」とつづけていて、ふたつの行為をはっきり区別していることがわかる。ただし、9年後の「昔の国語教育」で、「口説といふ歌ひもの」といういいかたもしている⁽⁴¹⁾。

藤田徳太郎は、1931年の『日本歌謡の展開』で、さきの岩橋小弥太による指摘を引用して「…の如きも琵琶法師の語り物」といっているほか、江戸時代後半の浄瑠璃について「語り物より唄物と化した」とも述べている⁽⁴²⁾。あとのほうの文言から、対照的なふたつの様式が存在を藤田が考えていたこと、語り物でないほうの様式を「唄物」としてとらえていたことがわかる。江戸時代以来の、広義の歌い物の語を彼が知っていたため、非語り物を歌い物とはいいいくかつたのであろう。藤田は、岩橋説の引用のすぐあとに「これら(引用者注=平家物語

や曾我物語などの一節)が室町時代には、巷間門付けの謡ひ物となつてゐた事が知られる」と使っている。

ところで、おなじ書のべつのところで、彼は、「邦楽には、歌ふものと語るものとの二種類がある」という⁽⁴³⁾。それなのに、語り物の語も「唄物」の語も、そこでは使っていない。藤田の頭のなかでは、歌うと語るとは明確に区別していながら、「唄物と語り物」という対概念は、かならずしも確固としたものになりきつてはいなかったとみることができよう。

藤田は、注 43 の文章にすぐつづけて、口説は両者の中間に位置する旨をいつている。歌うと語るとを、詞章のみによってではなく、音楽性をも十分に考慮しつつ論じていることがわかる。なお、筆者の立場からは、口説は歌い物である。「まえがき」で「叙事的な詞章でありながら、音楽としては典型的な歌い物」と述べたとき念頭においていたのが、まさにこの口説の類であつた。

33 年には、兼常清佐の『日本音楽』が出る。「これが日本音楽の負ふ運命である」とむすぶ同書の第 1 編「現在の日本音楽の有様」は、文章の形で兼常が発表した、日本音楽に対する否定的見解の最初の目立ったものかとおもうが、そこで彼は「近頃の三味線の音楽は、大体語りものと唄ひものゝ二つに分けることが出来る。語りものを代表するのは義太夫である。唄ひものを代表するのは、大仕掛けのものでは長唄であり、小仕掛けのものでは歌沢である」という⁽⁴⁴⁾。日本音楽全体を対象とする講座のなかで、三味線音楽にだけ、この概念を適用しているわけで、これは注 13 の引用以来のことである。平曲にもくわしかつた兼常だが、この講座では、平曲には言及していない。

さらに 34 年、町田嘉章(佳声)は『邦楽鑑賞法』で、平曲を「語り物」とし、さらに三味線音楽について、「語り物」と「唄物」に 2 分して、それぞれに属する種目、流派を図示した⁽⁴⁵⁾。しかし、その概念を明確に規定してはいないうえ、そのあとの種目流派ごとの説明は、この分類とは別の順序でおこなっている。また河東節や清元節の声のパートを「唄」ともいつている⁽⁴⁶⁾。

いじょう見てきたように、音楽の分野で語り物の語が使われたのは、主として平曲(ついで浄瑠璃)をめぐる論のなかであつた。それにもかかわらず、たとえばおなじころ刊行された沼沢竜雄『平曲』では、音楽的特質にも言及していながら、この言葉は使われていないようである⁽⁴⁷⁾。平曲研究の分野でも、かならずしも普遍的な用語にはなっていなかったといえそう。

それよりも、柳田国男による語り物の語の使いかたが、このころから微妙に変わってきていることに注意する必要がある。たとえば「口承文芸とは何か」は、1932 年刊行の岩波講座日本文学『口承文芸大意』の題を改めたものだが、そこではカギ括弧をつけて「語りもの」あるいは「かたりもの」といつているのである⁽⁴⁸⁾。これらは、民謡あるいは歌と対比されているようであるが、その民謡と歌はカギ括弧なしである。さきにあげた 4 年前の使用例は、いずれもかたり物、語り物などといった、ふつうの書きかただった。あえていえば、

ごく気楽に使っていたのであろう。それに対してカギ括弧の使用は、柳田が、何か特別なおもいをこめて、あるいはすこしばかり身構えて、この言葉を使っているらしいことを感じさせる。これは「普通語」としての語り物ではない、という気持ちの表れではなからうか。

35年から36年にかけて連載されたという「昔話と伝説と神話」では、「文句に節のあるものだけは、特に古風のまゝにカタリモノと名づけて、ハナシとは区別して居る」とある⁽⁴⁹⁾。この片仮名表記からも、カギ括弧つきとおなじ印象をうける。ここでは、そのすこしあとに「楽器に合せて節面白く説く物だけを、語り物などいふやうになつて…」というように⁽⁵⁰⁾、カギ括弧なしの通常の表記による使用も見られる。「ハナシとは区別」されるカタリモノと「楽器に合せて節面白く説く」語り物とは、別物なのであろう。

それ以後の柳田の稿を見ると、漢字を用いた通常の表記、片仮名のみの表記、平仮名のみの表記が使われており、カギ括弧つきもある。1編のなかでの使いかたについては、どれか1種類のみという稿もあるが、ふたとおり、あるいはそれ以上の表記が使われている例も多い。そういうばあい、研究用語と普通語を併用したことによるものと、初出箇所でカギ括弧をつけ、2度目から通常表記に変えたことによるものとの両方があるように見うけられる。

なお、この語が題名にまで用いられたものとしては、38年発表という「語り物と物語り」があり⁽⁵¹⁾、見てのとおり通常の表記である。同稿本文中での使用は3か所あり、注51の『定本』によって出現順で示すと、「カタリモノの統一」「在来の語り物」「木版のかたりもの」と3様である。柳田が、どのように区別しようとしたのか、筆者には何ともいえないが、とにかく複数表記混用の見本になっている。

柳田による語り物の語の使用は、かならずしも多いとはいえないかもしれない⁽⁵²⁾。けれども、彼が「語り物」の意義をつよく認識しつつ、するどくかつ詳細な考察を多数おこなったことは、その後のこの分野の進歩に大きな影響をおよぼし、最近の口承文芸研究の進展に直接つながっていく。

この時期になると、一般の辞典でも、語り物の語は、市民権を獲得することになる。これが辞典項目としての最初の事例であるという自信はないが、まず『言海』を大幅に増補して1932年に刊行された『大言海』第1巻では、「かたりもの」の項が立てられた。ただし、なぜかそれは空見出しであった。内容を、おなじ巻の前のほうにある「うたひもの」に送っているのである。それでいながら「うたひもの」は、『言海』のその項の文章にわずかに手を加え、実例を列挙したあとに、「浄瑠璃節などの詞を平語の如く語るを、かたりものと云ふ」とするにとどまっている。なお、「よみもの」の稿も、『言海』の記述を増補しているが、語り物の対語としてのあつかいではない。

それに対し、2年後に平凡社から刊行された『大辞典』は、第3巻の「ウタイモノ(謡ひ物)」の項で「節をつけてうたふべき詞曲の総称。神楽歌・催馬楽・風俗歌・今様歌・宴曲・謡曲・長唄など。これに対して、平曲・幸若舞曲・義太夫節などを語り物といふ」と、第6巻の「カタリモノ(語り物)」の項で「一、節を付けて語るもの。謡ひ物に対す。平家・浄瑠璃等の類。

二、(略)」というように、両者を対概念としてあつかって、それぞれの語義を示している。なお、2年後の36年に刊行されてこの辞典の本文部を完結させた第25巻には「ヨミモノ(読み物)」を立てて、3義を説明している。しかし、そこに語り物の対概念はない。

『大辞典』の「主なる執筆者」には、渥美清太郎、笹川種郎(臨風)、田辺尚雄、藤田徳太郎、町田嘉章などが名をつらねている。筆者は、このなかの町田あたりが執筆を担当したのではないかと想像する。なお、編纂顧問の1人でもあった笹川は、のちに自身の著書で、三味線音楽を「語りものゝ浄瑠璃と、謡ひものゝ唄」とに2分した⁽⁵³⁾。

国語辞典でなければ、『大言海』とおなじ年に新潮社から出された藤村作編『日本文学大辞典』第1巻は、「謡ひもの」と「語りもの」を空見出しとして立て、ともに「文学の種類を見よ」とした。ただし、2年後に出た同辞典の第3巻には「文学の種類」という項はなく、「文学」の項の「種類」という小項で、この事柄をあつかっている。すなわち、「鑑賞の手段方法から文学の種類を見る」として文学の5種類をあげる。第1は「謡ひ物」、第2は「語り物」、第3は「読み物」、第4は「広義の戯曲の類」、第5は「以上の四つの種類以外のもの」すべて、すなわち文字によるものであるという。執筆担当は「(佐藤)」とあるから、巻頭の「執筆者氏名」に掲げられているなかでただひとり佐藤姓の人物、つまり文学論担当の佐藤幹二であったろう。この辞典には、音楽の専門家も何人かかわった。しかし、大項目主義の文学辞典であったために、彼らに語り物などの小項目を依頼する、ということにならなかったであろう。なお、文学の種類の3番目としてあげられた「読みもの」は、空見出しも立てられていない。

いずれにしても、「語り物」は、すくなくとも言葉としては、1930年代前半には、定着したとみることができる。

4 「語り物」の深化

第2次大戦終了後の1946年8月、柳田国男は、それまでに発表した論考9編をまとめ、『物語と語り物』と題する1冊にして刊行した⁽⁵⁴⁾。こんにち、民俗学の分野では、語り物に関する基本的な先行研究として、つねにまっさきにあげられるものである。

1949年3月、町田嘉章(佳声)は雑誌「日本音楽」に「邦楽術語事典抄未定稿」の連載を開始し、その年発行の第19号に「ウタイモノ(謡物)」を、翌50年発行の第25号に「カタリモノ(語り物)」を立項した。そして、おなじ町田による単行本『ラジオ邦楽の鑑賞』にも、付録のひとつとして「邦楽用語・術語事典抄」が収録された⁽⁵⁵⁾。このふたつの「事典抄」の内容は、同一ではない。後者は、前者の連載の、たぶんカ行が終了したぐらいの時点で刊行されたものであり、そこまでのぶんは後者が前者の、それ以後のぶんは、ぎゃくに前者が後者の、それぞれ改訂版になっているからである。

そこで、両者の歌い物と語り物の項を比較すると、「ウタイモノ」は基本的には同文だが、「カタリモノ」のほうは、雑誌連載が「世の中のいろいろの出来事や人の事跡などのことを文章に綴り、または戯曲風に仕組んで演ずる歌曲を総称してカタリモノという(後略)」であるのに対し、単行本では「節を付けて語れるような叙事的な詞文をカタリモノという。従つて詞文の音楽化されたものがカタリモノなのである」というように、かなりちがっている。町田がいろいろ考えなおしている様子を、見てとることができる。カ行の最初の「カ」の部分であるから、これはとうぜん『ラジオ邦楽の鑑賞』のほうが訂正版であるが、書きあらためてもなお、概念の整理は、まだ十分であるとはいいがたい。

しかし、町田はその2年後に、論文「三味線声曲に於ける「語る」と「謡う」ことの音楽的意義と本質」を発表した。そこでは、各種三味線音楽からてきぎ楽曲を選んで詳細に分析しつつ、はじめてこの問題を深く掘りさげて考察した⁽⁵⁶⁾。そして、「音楽上の「語り」は、例えば旋律や音階やリズムなど、音楽構成上の主要条件を或る程度無視しても、詞に即し、気分^(ママ)に即して行くところに大きな特色があるので、その点でも義太夫節が他の浄瑠璃に止べて(引用者注=「比べて」であろう)、如何に「語り」に徹底しているかが伺い知れる」とし、また「「謡う」ということの音楽的特色は何処にあるかと云えば、それは勿論旋律にあり、美しい声で正確に謡うということ^(ママ)で万事をつくしている」と明快に述べた。けれども、この論文の主眼は、両様式の概念規定というより、両者の境界がかならずしも明確ではなくなっている事実の指摘にあって、「その意味で現代の長唄、歌沢、小唄等々々、何れも最早^(ママ)や「謡い物」ではなくして、「語り物」なのである」と論をむすんでいる。

翌53年、吉川英士(英史)は、『邦楽鑑賞手帖』を著した⁽⁵⁷⁾。吉川は、その冒頭の「横に見た邦楽」で、雅楽や民謡も含めた日本音楽をまず声楽と器楽に大別し、声楽についてはさらに歌い物と語り物に2分した「邦楽分類表」を示している。そして、実際には両様式が「相交錯して、その対照の妙を狙った曲が、「語り物」の曲にも、「歌い物」の曲にもある」と述べたうえで、「歌い物的要素と語り物的要素との濃淡の關係」を図示した。これは、単純に歌い物と語り物とに2分するのではなく、もっとも「歌い物的」と、もっとも「語り物的」とを両端とする座標軸上に、各種の声楽を、三味線音楽とその他の音楽とに分けて配置することによって、「濃淡の關係」を示そうとしたものである。きわめてわかりやすい図で、多くの邦楽愛好者や研究者が、これによって啓蒙、啓発されたこととおもう。筆者自身も、『邦楽鑑賞入門』⁽⁵⁸⁾に再録されたその図に接したとき、豁然と道がひらかれたように感じたものである。

『音楽事典』12巻⁽⁵⁹⁾は、当時として画期的なものであったが、その事典がふたつの言葉を取りあげたのは、当然すぎるほど当然であった。しかし、1954年の第1巻の「歌いもの」は空見出しで、「かたりもの」を見よ項目としている。そして翌55年刊の第2巻に「語り物」を立項して、3義を示した。第1義は「物語の筋を持つ叙事詩体の歌詞」とであると定義して、9種目を例示する。第2義は「「唄(謡)い物」に対する対語。旋律やリズムのような音楽的

な面の外に内容の表現や言語のアクセントなどを重要視する声楽」と定義し、もっとも語り物的な表現の例として、平曲の白声、浄瑠璃の詞や地合を、また、語り物音楽の代表として義太夫節を示している。第3義は演目の意味である。

見よ項目であるはずなのに、直接的には歌い物をまったくあつかっていないわけで、きわめて簡略な記述にとどまっているといわざるをえない。しかし、55年刊の第4巻の「三味線音楽」の項では、多数の流派の分類を、まず語り物と歌い物によっておこなっているし、56年刊の第7巻の「日本の音楽」の項では、中世音楽と近世邦楽を語り物と歌い物に分けて「系統・分類」のbとしている。

その後に数多く発行された日本音楽の概説書の類から、ふたつの語を用いていないものを探したすのは、むずかしいとおもう。『音楽事典』は、良かれ悪しかれ、刊行後しばらくのあいだ日本音楽の研究と解説に大きな影響をおよぼしつづけたのであるが、語り物、歌い物についても、本質的な点での検討、吟味がおこなわれないうまま、もうひとついえば、対概念を提示したのは誰かということが確認されないまま、直接的にはその『音楽事典』の存在を後ろ盾として、おなじことが書きつがれていくのである。

しかしながらいっぽうでは、歌い物が音楽としてごく当たり前のものであるのに対して、語り物はやや特別な性格を持っているという認識も、識者のあいだに存在していたようにおもわれる。たとえば、66年10月14日に、第21回芸術祭主催公演として「語り物の系譜」と題する音楽会が、文部省芸術祭執行委員会と財団法人演劇研究会によって催された⁽⁶⁰⁾。そして、その日の解説パンフレット冒頭の「あいさつ」には、「極めて特殊な性格を有する語り物」と書かれているのである。筆者は、おなじ時期の音楽会をつぶさに調べたわけではないが、それに対する「歌い物の系譜」といったような音楽会が企画開催されたことは、なかったのではなかろうか。

5 対置への疑問

そうしたところに、1974年、平野健次は、論文「近世歌謡における諸問題——とくに音楽用語の検討を中心に——」を発表する⁽⁶¹⁾。ここで平野は、歌い物と語り物も取りあげ、この二大別は「現在における便宜的な分類である」とし、歌い物の語は、語り物に対して「語呂合わせ的」にいつているのだとした。平野はさらに、「声楽曲はすべて「歌」であって、その「歌」の中で特殊な性格を持つものが「語り物」と区別されうるので、「語り物」を除いた「歌」を、あえて非語り物的な歌としての区別名称を立てるには及ばないようにもおもう。標準的な「歌」としては、「歌謡」の語を用いてもよいのではなかろうか」ともいう。これは鈴木鼓村による対概念措定に対しての、最初の本質的な疑問といえるのではなかろうか。しかし、平野のいう「非語り物的な歌」と「標準的な「歌」」との関係がよくわからないものの、「歌謡」

の語を用いて「語り物」と対比するぐらいなら、たとえ「語呂合わせ的」な言葉であったとしても、「歌い物」を使うほうがはるかにわかりよいと、筆者は考える。

同稿で平野は、「謡曲などは、これは明らかに演劇であって、そこに「語り」の要素が含まれてはいても、「語り物」そのものではない」ともいう。しかし、もしそうであるならば、たとえば義太夫節についてもおなじことがいえるのではなからうか。むしろ、能は演劇である。しかし、その構成要素としての謡（謡曲）は、語り物・歌い物の考察から除外することのできない声楽であると、筆者は考える。

平野はさらに、上記の町田論文に検討を加えたうえで、ふつうの話しかたにいちばん近い形から音楽としてもっとも整った形までの段階を区別して、それぞれを吟誦、朗誦、詠唱、節唱、歌唱と名づけた。そして「原則として叙事的散文の詞章を「吟誦」する場合と、「朗誦」する場合の両態が「語り」として存在するのではなからうか」とし、また「朗誦」が主体となる音楽芸能が、音楽としての「語り物」である」と結論づけた。これは、語りという表現形式を、もっとも限定的にとらえたものといえよう⁽⁶²⁾。平野のこういった考えは、のちの『音楽大事典』や『日本音楽大事典』でも繰りかえされる⁽⁶³⁾。

さて、1975年1月から10回にわたって、東京の国立劇場が「日本音楽の流れ」と題する公演をおこない、その年10月の第2回では「語りもの」が、78年10月の第6回では「歌いもの」が、それぞれテーマとされた⁽⁶⁴⁾。「語りもの」は、前述の「語り物の系譜」の9年後ということになる。いずれも吉川英史の監修によるもので、吉川は、それぞれのパンフレットに「「語りもの」について」、「「歌いもの」について」という解説文を載せている⁽⁶⁵⁾。そこからは、語り物と歌い物について、彼がいろいろ考えなおしたらしいことが読みとれる。

語り物については、吉川は「内容上からいう「語りもの」、すなわち文芸という語り物と、「演奏様式上からいう「語りもの」、すなわち音楽という語り物をはっきり区別し、後者は「「歌いもの」に対立する用語」であるとした。さらに語り物音楽の特質をも論じ、「ただし、「江州音頭」のような「くどき」は「形式的には、「語りもの」的ではない」と述べている。そして、「語りの密度（強弱）表」という図によって、語り物についてのみではあるが、前掲旧著の「歌い物的要素と語り物的要素との濃淡の関係」と同様の図示をおこなった。記入されているのは、そのとき演奏された12の音楽の種目・流派名であるから、とうぜん旧著のそれとはすこし違ったものになっている。なお、義太夫節については、「単なる「語りもの」の域を脱して、劇音楽にな」っており、「何か新しい分類用語が必要」とおもわれること、そして「能楽も同じ」であることが述べられているのが興味深い。

3年後の歌い物についての一文では、語り物に対する歌い物と、器楽曲に対する声楽曲という意味での歌い物の2義があることを指摘したうえで、使用音、リズム、テンポなどといったやっつの要素ごとに「うたう」と「語る」の「一般的相違点」を表示している。

国立劇場の「歌いもの」の公演から9年を経たのち、吉川は、語り物と歌い物という対立に、さらに大きな疑問を投げかけた。1987年の「日本歌謡の様式の三大分類」は、その年度

におこなわれた学会での講演を文章化したものとのことだが、吉川はここで、語り物と歌い物に対する従来の説明を整理して検討したうえで、「吟じ物」を追認して3大分類とすることを提唱したのである⁽⁶⁶⁾。国立劇場のふたつの公演の監修が契機となって、従来の2分類に疑問を感じるようになっていた吉川が、吟じ物の着想にまでいたったのは、詩吟の音楽的様式を考える機会があったため、詩吟は歌い物の側面と語り物の側面をもっていて、2分類のどちらに入れても問題があるとおもったのだという。そして、おなじように従来の2分類では処理しにくい朗詠と琵琶楽を詩吟に加えて、その「様式概念として、「吟じ物」という第3の様式を認めることが、実状に合致している」という結論に達したものである。

しかし、さきに引用した12年前の見解、すなわち、語り物の域を脱して劇音楽になっている義太夫節や能の謡に対して新しい分類用語が必要と考えたことについては、吉川は特別な分類用語の提唱をしていない。そのかわりに、「現在では能楽とか文楽などの演劇の一要素である謡曲や義太夫節は語り物に入れない方がよいと思っている。これらは、語り物系に属した声楽が、舞台芸術化し、演劇化したものであると解すべきである」といっている。いずれかの段階で、平野の見解から影響を受けたものと想像するが⁽⁶⁷⁾、その結果、吉川は謡や義太夫節を「三大分類」の埒外に置く、つまり、声楽とはまったく別に扱う、ということになった。

さて、従来の2分類が絶対でも万能でもないことは、町田以後の誰もがいうところである。しかし、吉川による従来の考えかたの整理には、筆者はいくつかの疑問を持つ。いちばんの疑問は、国立劇場公演「歌いもの」のパンフレット以来のものなのだが、吉川が「歌う」は拍節的で「語る」は非拍節的である、としている点である。朗詠は歌い物ではないという結論は、そこから導かれる。

岩原諦信がいう「歌う声明」は、吉田恒三らがいう「序曲」に対応するが、歌う声明や序曲の大部分は、非拍節的リズムである。しかしこれらは、民謡の追分とともに、けっして語り物ではない。「語根の中もかまわず伸ばす」点でも同様である。非拍節的リズムの声明や民謡は、吉川のこの考察では実例として取りあげられていないので、それらがどう考えられているのか、筆者にはわからないのだが、「吟じ物」ということになるのだろうか。

いずれにしても、吉川のこの提唱に対しては、これまでのところ、特別な反応はないようである。筆者にしても、問題が大きすぎて、何もいうことはできない。しかし、これによって、語り物と歌い物の概念が再検討され、認識がいつそう深まったことはたしかで、有意義な提唱だったといえよう。

いっぽう、民俗学や国文学の分野における、語り物についての再認識や再検討は、音楽以上におこなわれているとおもう⁽⁶⁸⁾。「語り物」と同義語ではないが、「口承文芸」というものに対する認識が、その分野でますます大きくなっているのは、その表れのひとつである。ただし、吉川英史が指摘したように、民俗学、国文学という語り物と、音楽学という語り物には、若干の差異がある。

6 「歌い物」補説

ところで、歌い物の語は、語り物などよりはるかに長い用語史を持っている。『梁塵秘抄口伝集』巻第11冒頭の「唱物」が「うたいもの」であるなら、それなどが早い用例ということになる。ただ、平野健次は、注63に掲げた『音楽大事典』や『日本音楽大事典』などで「本来は「曲の物」といわれた器楽に対して、声楽一般をいう語」と説明しているが、歌い物の語が古いといっても、源氏物語に使われている「曲の物」にはおよばないようだから、はじめから対概念として成立したとはいえないのではなかろうか。

江戸時代以前の「うたひもの」は、一般には、宮廷周りでうたわれる声楽、具体的には、だいたい神楽歌、催馬楽、朗詠、今様、…、つまり郢曲のほぼ同義語として説明されるのがふつうのようである。たしかにこれらは、いずれも語り物ではない。朗詠を吟じ物であるとする吉川説をべつにすれば、今日的な意味での歌い物ばかりということになる。ただし、活字では「謡ひ物」などと表記、翻刻されている例がすくなくないようだ。現在の雅楽でも、管弦の催しで演唱される催馬楽と朗詠を合わせて「謡ひ物」といつている。この事実が、ある種の誤解を惹起しているばあいがあるように、筆者にはおもえてならない。

それはそれとして、この言葉の実際の使用例を見ると、かならずしもいま述べたような使いかたばかりではなく、なかにはややちがった意味で使われているものもある。ここにその実例を、いくつか紹介しておこう。

まず、世阿弥は「五音曲条々」で、2回「謡ひ物」といつている。これは、「能としてではなく、謡として作詞作曲され、歌われた曲」であるという⁽⁶⁹⁾。

つぎに、新井白石は『俳優考』で「田楽の歌ひ物共、皆々猿楽うたひ物の如くに古へに有りしことを詞に述し事、彼の国(引用者注=中国のこと)の伝奇の如し」とか「己が国にて弄ぶ猿楽の歌ひ物を歌ふ」、「江口と云ふ歌ひ物」などと使っている⁽⁷⁰⁾。最初にあげた「田楽の歌ひ物」、「猿楽うたひ物」は、演者の意味であるかもしれない。

藤井高尚の『弾き物のさだめ』には、「中昔のいまやうといふうたひもの」などのほかに、「じやうるといふうたひもの」ともある⁽⁷¹⁾。浄瑠璃も歌い物なのである。

山崎美成も『歌曲考』で、「これ(引用者注=東遊)も、神楽催馬楽とおなじく、うたひものなり」、「この浄瑠璃といへる、唄ひもの」という⁽⁷²⁾。やはり浄瑠璃も歌い物としている。

明治以後の文献からひろうならば、『歌舞音楽略史』では、その第5に「(神楽の)謡ひ物」、第6に「催馬楽、風俗、朗詠、今様、等のうたひ物」とあるほかに、第7には「後世の能の謡曲も、平家と田楽のうたひ物とを撮合して…」と使っている⁽⁷³⁾。

森鷗外が、1916年に連載したという『渋江抽斎』では、「「四つの海」は抽斎の作った謡物の長唄である」と使われている⁽⁷⁴⁾。「四つの海」という曲は、現行曲ではないようだし⁽⁷⁵⁾、詞章も作曲者も分からないが、ここで「謡物」といつているのは、「語りのものではない、唄の

もの」、つまり、現在の歌い物に近い意味なのではなかろうか。しかし鷗外が、おなじ『渋江抽斎』の別のところで「四つの海」は、今猶杵屋の一派では用ゐてゐる謡物の一つ」と使っているのは⁽⁷⁶⁾、「曲目」の意味にとることでもある。

森鷗外の使いかたなどのように、すこしちがうものもあるが、これらの歌い物はだいたい「声楽」という意味と考えてよい。けれども、どれをとっても、限定された範囲のみを対象としての使用であるから、総称とはいえないようにおもう。「歌い物の語は、声楽の汎称として使われていた」といったら、的確な表現になるだろう。

あとがき

筆者は、第5節の最後で、現在、民俗学や国文学という語り物と、音楽学という語り物とのあいだには若干の差異があると述べた。本稿は、そのことを論ずるのが目的ではないので、ここでは関連分野の辞典や事典等でのあつかいのちがいを指摘して、あとがきとしたい。

いちばん目につくちがいは、音楽事典の類では、いっばんに対概念の一方としてあつまっているのに対して、民俗学事典、文学事典の類を見ると、「語り物」の項があつて詳述されているのに、「歌い物」などといった項はない、という点にある。

ただし、音楽事典のなかにあつて『音楽大事典』と『日本音楽大事典』は、平野が前述のような書きかたをしているわけだし、ほかにも平野は、歌物または歌い物と語り物とに「分類することがある」とか⁽⁷⁷⁾、「語り物」ではないという意味の「歌い物」という用語も必要である」というように書いている⁽⁷⁸⁾。このふたつの文章には、語調のうえで、若干の差異を感じる。

では民俗学などの事典での記述がどうなっているのかというと、もっとも新しい『日本民俗大辞典』では、「口頭で演じられる物語、またはそれを演じる芸。散文口調で語られる昔話、笑話、落語などに対して、より韻律的、旋律的に語られる物語を特に語り物という」として⁽⁷⁹⁾。とうぜん、この事典には歌い物の項はないのだが、非「語り物」となる「昔話、笑話、落語など」を一括する概念も示されていないようである。

最新の文学事典である『日本古典文学大事典』でも、まったくおなじあつかいである⁽⁸⁰⁾。『日本民俗大辞典』での執筆者と同一人が担当しているので、記述内容も、基本的には変わらない。

題名が酷似している『日本古典文学大辞典』にも「語り物」の項があつて、「口承文芸の中、長編もしくはそれに近い物語で、しかも節を付けて語るもの」と定義する⁽⁸¹⁾。これは何かに対する対概念ではないから、やはり歌い物も読み物も立項されていない。

『日本歌謡辞典』は、「謡い物」と「語り物」の両項を立ててはいる⁽⁸²⁾。しかしながら、「謡い物」では、「語り物」と対立するとして両者の対比もおこなっているのに対し、「語り物」

はそうではなく、ほとんどその概念の説明に終始している。すでに吉川英史が指摘しているように、「語り物」の項で「謡曲」を語り物のほうに入れているのに対し、「謡い物」の項では「謡い物」の代表は謡曲である」とするような不整合も見られる⁽⁸³⁾。これは正誤の問題ではなく、定義、概念規定のちがいのだとおもう。ふたつの項は、たがいに見解を異にする別人が担当したものに相違ない。

いっぽう、国語辞典ではどうなっているかというと、筆者はそのすべてを点検したわけではないが、多くは音楽分野でのとらえかたに準じたあつかいをしている、といえるとおもう。いずれも、歌い物の項とともに、対概念としての語義を簡潔に示している。これは、『大言海』や『大辞典』、とくに後者以来の流れと見てよい。

ここで、『日本歌謡辞典』に触発されて、謡(謡曲)が、それまでどのようにあつかわれていたのかを、かんたんに見ておくことにする。

まず、本稿で引用した、語り物(と歌い物)を論ずる先行研究で、謡を考察の対象に含めているものは、あまり多くない、という事実を指摘しておこう。ことによると、能または謡についての平野健次の認識と共通する認識を、すでに先学が持っていて、意図的に対象から除外していたのかもしれない。

けれども、すくないながらも、謡をあつかっているものがある。そして、『日本歌謡辞典』に端的にあらわれているように、どちらに含めるかについては、ふたつの立場に分かれる。

対概念の生みの親である鈴木鼓村は、「平曲」は「語り物」の祖であるならば、「謡曲」は「謡物」の中興であらねばならぬ」といい⁽⁸⁴⁾、前掲の『大言海』、『大辞典』、『日本文学大辞典』も、歌い物に含めている。いずれも、漢字では「謡い物」と表記しており、そのことに引かれたものかもしれない。

いっぽう、謡を語り物とする見解は、初期のものからは見いだせない。「謡」ではなく「能」としてならば、1970年に、本田安次が各種の語り物を論じた「語り物の舞台化」と題する論考のなかで、能も取りあげて幸若などとの相違を指摘しているし⁽⁸⁵⁾、おなじ趣旨のことは、「語り物の舞台化」という言葉こそ使っていないものの、すでに1949年に発表している⁽⁸⁶⁾。それに対し謡をはっきり語り物と規定したのは、管見では、吉川英史が最初のようなのだ⁽⁸⁷⁾。そして、まもなく平凡社の『音楽事典』で謡が語り物に分類されたため、平野による前述の指摘があるまでは、音楽の分野ではそう考えるのが当たり前だったし、現在でもその状態がつづいている、といえそうな気がする。

語り物とは何か、あるいは、何を語り物とするのか、これは語り物であるのかないのか、といったことは、音楽研究者のあいだでさえも、微妙にちがっているばあいがある。したがって、いま、その語の統一的な定義を設定することはむずかしいにしても、語り物について討論や共同研究をしようというときには、「自分はこのような意味で使っている」ということをまず表明することが必要なのではなかろうか。

〔注〕

- (1) 村上静人『軒並娘八丈／萩の枝折』（人情本刊行会、1916年）、242 ページ。
- (2) 高野辰之『歌舞音曲考説』（六合館、1915年）によったが、同稿の冒頭には「明治四十四年三月稿」とある。「語り物」の語は、同書の318、320 ページ。
- (3) やはり前掲の『歌舞音曲考説』によるが、同稿冒頭には「明治四十二年稿」とある。「一中節の語り物」は同書の517 ページ、「播磨掾の語り物」は同書の319 ページ。
- (4) 斎藤賢編『斎藤緑雨全集』巻7（筑摩書房、1991年）によった。引用は、その114 ページ。
- (5) 夏目漱石『吾輩は猫である』2。『漱石全集』第1巻（漱石全集刊行会、1918年）なら、79～80 ページ。
- (6) 高野前掲書の随所。
- (7) 同書の復刻本に加えられた索引（渥美かをる作成）に、「語り物」の項がない。
- (8) 鈴木鼓村『日本音楽の話』（画報社、1913年）。引用は、それぞれ1 ページ、3 ページ。
- (9) 鈴木前掲書、26 ページ。
- (10) 鈴木前掲書、45 ページ。
- (11) 兼常清佐『日本の音楽』心理学論集2（六合館／服部書店、1913年）。
- (12) 塚原康子によれば、末松謙澄はその30年も前に「日本音楽史」という言葉を使っている。（塚原康子「明治前期の日本音楽史研究」（小島美子、藤井知昭編『日本の音の文化』（第一書房、1994年）の注18。）
- (13) 同書、97 ページ。
- (14) 同書、123～130 ページ。引用した文言は125 ページ。
- (15) 同書、100 ページ。
- (16) 那智俊宣『日本音楽の聴き方』サンデー毎日叢書第6編（大阪毎日新聞社／東京日日新聞社、1924年）。
- (17) 那智前掲書、141 ページ。
- (18) 『平家物語考』（文部省内国語調査委員会編『国語資料平家物語につきての研究』（国定教科書共同販売所、1911年）の前編）の246～7 ページ。
- (19) 『津田左右吉全集』別巻第4（岩波書店、1966年）、121 ページ。
- (20) それぞれ、同書の232、234 ページ。
- (21) 『津田左右吉全集』別巻第3（岩波書店、1966年）。
- (22) 高木市之助ほか編『平家物語』増補国語国文学研究史大成9（三省堂、1977年）、252 ページ下段。
- (23) 同書、73 ページ。
- (24) 岩橋小弥太『京畿社寺考』（雄山閣、1926年）。引用は、それぞれ163、164 ページ。
- (25) 高野辰之『日本歌謡史』（春秋社、1926年）。
- (26) それぞれ、同書の413、793 ページ。
- (27) 同書、621 ページ。
- (28) 田辺尚雄『日本音楽の研究』音楽叢書第11編（京文社、1927年）。
- (29) 田辺尚雄『日本音楽講話』（岩波書店、1919年。改訂版は1927年）。
- (30) 同書、11 ページ。
- (31) 田辺尚雄『続田辺尚雄自叙伝』（邦楽社、1982年）、264 ページ。
- (32) 田辺尚雄『日本音楽史』（雄山閣、1932年）。引用は、それぞれ235、315 ページ。
- (33) 伊庭孝『日本音楽概論』（厚生閣書店、1928年）。引用は、それぞれ695、699 ページ。
- (34) 同書、850 ページ。
- (35) 伊庭孝『日本音楽史』音楽講座第17編（学芸社、1934年）。
- (36) 『定本柳田国男集』第17巻（筑摩書房、1973年第5刷）、231 ページ。

- (37) 『定本柳田国男集』第6巻(筑摩書房、1973年第6刷)、506ページ。
- (38) 『定本柳田国男集』第7巻(筑摩書房、1973年第6刷)、17ページ。
- (39) 『定本柳田国男集』第5巻(筑摩書房、1973年第6刷)、350ページ。
- (40) 柳田は、たとえば「口承文芸史考」で、「幸ひなことには此の語(引用者注＝「説話」のこと)はまだ「昔話」のやうに、完全に普通語にはなり切つて居ない」といっている(前掲『定本柳田国男集』第6巻、66ページ)。
- (41) 『定本柳田国男集』第19巻(筑摩書房、1973年第5刷)、69ページ。
- (42) 藤田徳太郎『日本歌謡の展開』岩波講座日本文学(岩波書店、1931年)。引用は、それぞれ63、97ページ。
- (43) 同書、112ページ。
- (44) 兼常清佐『日本音楽』岩波講座日本文学(岩波書店、1933年)、26ページ。なお、「日本音楽に対する否定的見解」は、小学生対象ということでごく婉曲にはあるが、すでにその前年に発表している(兼常清佐『音楽の話と唱歌集』小学生全集第76巻(興文社／文芸春秋社、1927年)。
- (45) 町田嘉章『邦楽鑑賞法』音楽講座第18編(学芸社、1934年)。引用は、それぞれ29、34ページ。34ページの「唄物」は、「うたもの」であろう。
- (46) 同書、40、43ページ。
- (47) 沼沢竜雄『平曲』岩波講座日本文学(岩波書店、1932年)。
- (48) 前掲『定本柳田国男集』第6巻、43ページほか。
- (49) 前掲『定本柳田国男集』第6巻、67ページ。
- (50) 同書、68ページ。
- (51) 前掲『定本柳田国男集』第7巻に「北国の民間文芸」と改めたうえ、ほかの8編と組み合わせて「物語と語り物」の1編として所収。
- (52) 『定本柳田国男集』別巻5(筑摩書房、1973年第4刷)の総索引を見ると、「語り物」の使用箇所が約40あげられている。これは「歌ひ物〔謡ひ物〕」の約5か所よりは多い。そのほか語りに関する語としては、語り、語りごと、語るなども掲出されている。柳田にとっては、文字化されていない叙事的口頭伝承が関心の中心で、歌ひ物と対比するという観念は希薄だったのだろう。
- (53) 笹川臨風『邦楽』(創元社、1944年)、6ページ。
- (54) 遺憾ながら、筆者はそのものを実見していない。ここでは、前掲『定本柳田国男集』別巻5所掲の「書誌」によって述べた。なお、この『物語と語り物』は、注51に示したように、前掲『定本柳田国男集』第7巻に再録。
- (55) 町田嘉章『ラジオ邦楽の鑑賞』(日本放送出版協会、1950年)。
- (56) 町田嘉章「三味線声曲に於ける「語る」と「謡う」ことの音楽的意義と本質」(『東洋音楽研究』第10/11合併号、1952年)。
- (57) 吉川英士『邦楽鑑賞手帖』(創元社、1953年)。
- (58) 吉川英史『邦楽鑑賞入門』(創元社、1959年)。
- (59) 下中弥三郎編『音楽事典』全12巻(平凡社、1954～57年)。
- (60) この催しは、第4回古典音楽特別鑑賞会を兼ね、文化財保護委員会などが後援している。
- (61) 平野健次「近世歌謡における諸問題——とくに音楽用語の検討を中心に——」(『国語と国文学』第51巻第10号、1974年10月)。
- (62) 平野は「語り物における言語と音楽」(『日本文学』第39巻第6号、1990年6月。上参郷祐康編『平家琵琶——語りと音楽——』(ひつじ書房、1993年)に再録)でも同様のことを述べている。

- (63) 下中邦彦編『音楽大事典』の「語り物」の項（平凡社、1982年、第2巻）、平野健次、上参郷祐康、蒲生郷昭監修『日本音楽大事典』（平凡社、1989年）の大項目「日本音楽」のなかの中項目「分類」の小項目「声楽の性格による分類」。
- (64) 第2回「語りもの」は、75年度文化庁芸術祭主催公演、第6回「歌いもの」は78年度芸術祭協賛公演でもあった。
- (65) それぞれ、1975年10月17日、1978年10月13日、国立劇場事業部発行。ともに、内容に無関係の手直しを加えて、山川直治編『日本音楽の流れ』日本音楽叢書9（音楽之友社、1990）に再録されている。
- (66) 吉川英史「日本歌謡の様式の三大分類」（『日本歌謡研究』26号、1987年）。「歌謡」の語はいろいろに使われるが、吉川がここでいう歌謡は、声楽と同義とみてよい。日本歌謡学会での発表なので、この語を使ったものとおもう。
- (67) 吉川前掲論文。ただし、吉川は、注63に掲げたうちの『音楽大事典』の「語り物」の項で、平野の見解を読んでいる。
- (68) たとえば、藤井奈都子「語り物研究主要論文とその解説——軍記語りを中心に便覧的に」（山下宏明ほか編『軍記語りと芸能』軍記文学研究叢書12（汲古書院、2000年））によって知ることのできる最近の研究状況からも、このことが想像できる。
- (69) 表章、加藤周一校注『世阿弥 禅竹』日本思想大系24（岩波書店、1974年）、201ページ。
- (70) 市島謙吉編集兼校訂『新井白石全集』第6巻（国書刊行会、1907年）、533～4ページ。
- (71) 藤井高尚『弾き物のさだめ』（文化11年）、それぞれ、6丁オ、10丁オ。蒲生郷昭ほか編『弾き物のさだめ——翻刻と校訂——』（私家版、2002年、発売：邦楽社）を参照。
- (72) 藤田徳太郎校訂『歌曲考』（大岡山書店、1932年）、それぞれ15、101ページ。
- (73) 小中村清矩『歌舞音楽略史』（吉川半七、1888年）、それぞれ、乾31丁オ、同43丁オ、同47丁オ。岩波文庫本なら、それぞれ、66、84、89ページ。
- (74) 森鷗外『渋江抽斎』その55。『鷗外全集』第7巻（鷗外全集刊行会、1923年）なら、576ページ。
- (75) 稀音家義丸編『長唄伝承記録』（私家版、1997年）に、この曲の記載がない。
- (76) 『渋江抽斎』その2。前掲全集本なら、460ページ。
- (77) 注63に示したふたつの事典の「日本音楽」の小項目「声楽の性格による分類」。
- (78) ふたつの事典の「かたりもの」の項。
- (79) 福田アジオほか編『日本民俗大辞典』上下（吉川弘文館、1999～2000年）。執筆担当は兵藤裕己。
- (80) 大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』（明治書院、1998年）。執筆担当は注79の『日本民俗大辞典』とおなじく兵藤裕己。
- (81) 編集委員会編『日本古典文学大辞典』（岩波書店、1983年～85年）。執筆担当は山下宏明。
- (82) 須藤豊彦編『日本歌謡辞典』（桜楓社、1985年）。
- (83) 吉川前掲論文。
- (84) 鈴木前掲書、192ページ。
- (85) 本田安次『語り物・風流二』日本の民俗芸能IV（木耳社、1970年）所収。
- (86) 本田安次「一人称の語りと象徴的語法と——能狂言の特殊手法——」（『謡曲界』1939年4月号）。同稿は、本田安次『能及狂言考』（丸岡出版社、1943年）に再録され、同書は、さらに『新修能及狂言考』（能楽書林、1980年）として、再版された。
- (87) 注57におなじ。